

# Glocal Tenri



5

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.21 No.5 May 2020

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- ・ 巻頭言  
信者の定義  
／永尾教昭 ..... 1
- ・ 「おさしづ」語句の探求 (40)  
「おさしづ」第5巻における本部事情と「道」  
／澤井治郎 ..... 2
- ・ 日本語教育と海外伝道 (22)  
歴史の中の留学生 ①  
／大内泰夫 ..... 3
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (20)  
深淵を覗く一人間における不安と自由と可能性とは  
／金子 昭 ..... 4
- ・ イスラームから見た世界 (2)  
おやさと研究所とイスラーム②  
／澤井 真 ..... 5
- ・ コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論 (33)  
大統領暗殺事件 ②  
／森 洋明 ..... 6
- ・ 遺跡からのメッセージ (57)  
世界共通の危機に際して、新入生、在学生へのメッセージ  
／桑原久男 ..... 7
- ・ 現代宗教と女性 (27)  
COVID-19 とジェンダー  
／金子珠理 ..... 8
- ・ 天理参考館から (20)  
スポーツの歴史と文化 (1) 「走る」その 1  
／幡鎌真理 ..... 9
- ・ 図書紹介 (117)  
復興・宗教・ニューカマー—三木英の近著に見る宗教社会学の最前線—  
／金子 昭 ..... 10
- ・ おやさと研究所ニュース ..... 11  
新刊紹介 / 2020 年度公開教学講座の案内

## 巻頭言

### 信者の定義

おやさと研究所長 永尾教昭 *Noriaki Nagao*

海外で布教している日本人布教師は、教  
えを求めて自らの布教拠点に足を運ぶよう  
になった人を、当然「信者」にしたいと考  
える。適切な表現かどうかかわからないが、信  
者であるという「お墨付き」を与えようと  
する。それが国内ならば、ちばに帰り別席  
を運んでもらう。イニシエーションがない  
天理教では、事実上、別席受講がイニシエ  
ーションになっているからだ。したがって海外  
でも、結局、いきなりちばに帰ろうという  
話になりやすい。しかしながら、一般的には、  
その宗教の信者であるとお墨付きを得るた  
めに、いきなり高額を払って飛行機で外国ま  
で行かねばならないなどということは考え  
にくい。かなり無理がある。発展途上国なら、  
なおさらだろう。時には、日本人布教師が  
費用を出し、日本に連れていくという例も  
少なからずある。いずれ触れたいと思うが、  
別席の話は本来入信するための話ではない。  
また信者共同体をどうオーソライズするか  
という問題もある。天理教の特徴は、いくつ  
かの例外を除いて、教団が布教師を派遣して  
布教するという形ではなく、信者共同体、つ  
まり「講」といったものが自然に結成され、  
それが媒体となって教えが伝播されていった  
ところにある。教祖も「講を結べ」とその結  
成を促している。  
最初期は、まだ今日のような教団組織が  
整備されていたわけではないので、自然に  
できていった講に、どうオーソライズする  
かといった問題は起こらない。  
やがて、真明組、斯道会といった有力な  
講ができていき、その際には教祖の許しが、  
すなわちオーソライズであった。それから  
その配下の講、例えば斯道会の場合、斯道  
会第〇号といったように番号が振られてい  
くのであるが、それに際しては斯道会のい

わば創立者である深谷源次郎がその結成許  
可を出している(註)。  
さらに進んで、教祖が身を隠した後、天  
理教は教団として整備され、講は「教会」  
となっていく。教会の場合、法的手続きは  
別として、信仰的には「おさしづ」を仰ぎ、  
認可されるという形になっていく。  
海外でも、本部海外拠点は例外として、上  
記の日本国内での発展経過同様、信者がいわ  
ば自発的に信者共同体を結成し、それが成長  
して教会となっていくという道をとっている。  
日本人布教師(つまり「ようぼく」とい  
う資格のある者)が、永遠に信者を集め導  
いていくというのなら話は別だが、いずれ  
現地の人で共同体を作り、そこで教理解  
を深め、つとめを勤修し信仰的成人を遂げ  
ていかねばならないのは自明の理だ。まさ  
にその場合、そのスタート地点である信者  
共同体を誰がどのようにオーソライズする  
のが問題になってくる。実際、筆者は約  
30 年前にコンゴブラザビル教会に赴任し、  
また海外部ではヨーロッパ・アフリカ課長  
を務めたが、教会にやや遠方から参拝に  
来る信者たちが、自分たちの地元で共同  
体のようなものを作り、日々、つとめを  
勤めたり、信仰的な会合を持ちたいと希  
望してきた。しかし、天理教にはイニシ  
エーションがないから何をもちて信者と  
言うのかという問題もあり、それをどう  
認可するのか悩んだ。  
代表者が天理に帰り、「ようぼく」にな  
れればいいということも言えるが、上述  
のようにコンゴのような発展途上国の場  
合、いきなり、彼らがちば、つまり日本  
の天理まで飛行機に乗ってくることは金  
銭的に非常に困難である。  
したがって、とりわけ海外の場合、信  
者であると定義する「何か」が必要にな  
ると思う。  
[註]『天理教河原町大教会史』第一巻参  
照